

「間-帝国史」研究の理論と実践：  
開かれた研究枠組みの構築に向けて（科研：基盤研究B）

第1回研究会

▶ 報告タイトル

「シオニズムと聖書考古学  
～エルサレムおよびマサーフェルヤッタを訪ねて」

▶ 報告者

役重善洋

▶ 日時・場所

2023年1月22日14～17時（ハイブリッド形式）  
同志社大学烏丸キャンパスSK203 & Zoom

▶ 概要

本報告は、昨年11月に行ったパレスチナ／イスラエル訪問調査にもとづくものである。アーカイブズ調査、国際会議参加、被占領地視察等を実施した今回の訪問を通じて再認識したことの一つは、イスラエルの対パレスチナ政策における考古学の役割という問題である。近年、考古学遺跡が宗教原理主義的な政治に利用されるケースは、インドやスリランカなどでも顕著にみられる。それらの歴史背景に共通しているのは英国の植民政策と結びついた考古学調査である。英国の宗派分断政策がもたらした歴史認識問題／アイデンティティ政治の現在的展開の一例としてこの問題について考察したい。



エルサレム考古学パークから見た、パレスチナ住民追放が進むシルワーン地区（報告者撮影）

▶ 報告者プロフィール



役重善洋（やくしげ よしひろ）

同志社大学人文科学研究所嘱託研究員（社外）。大学非常勤講師。専門は政治思想研究。著書に『近代日本の植民地主義とジェンタイル・シオニズム：内村鑑三・矢内原忠雄・中田重治におけるナショナリズムと世界認識』（インパクト出版会、2018年）

